

## 美術の窓(112)

## 歴史を内在した作品

大和文華館館長 浅野秀剛

3月22日に、広島市現代美術館で、アーティストのサイモン・スターリング氏のトークがあった。実は、前日、所用で宮島口に泊まったので、本当に久しぶりに現代美術館を訪ね、旧知の若い友人と話しているうちにアーティスト・トークを聞くことになったのであるが、内容はとても興味深かった。私も柄にもなく質問したりして、得るところの多いトークであった。

スターリング氏は、1967年にイギリスに生まれ、現在はコペンハーゲンに住んでいるという。2005年にイギリスのターナー賞を受賞していることから分かるように、国際的に活躍し、認められたアーティストである。2011年1月から広島市現代美術館で日本国内初の個展を行う予定であり、その作家が緊急来日することになったので、急遽トークをお願いしたようだ。

スターリング氏は、インсталレーションを含む作品を制作する(あるいはパフォーマンスをする)に際し、物事に秘められた歴史を丹念に掘り起こし、それを取り入れた作品を制作するアーティストである。

例えば、ライン川のほとりに建つ、パーゼル現代美術館の依頼でインсталレーションをすることになった時は、川辺にあり、樫が壁に取り付けられていた古い木造の小屋を見出し、昔、川を移動するときに用いた小舟ヴァイトリングを再現することを思い付いた。そこで、小屋を解体し、その木材で舟を作り、余った木材を舟に乗せて川を下り、美術館まで運ぶ。着くと、舟を解体し、積んできた木材と合わせて元の小屋を復元・展示するというプロジェクトを考えた。復元された小屋は、一度

舟の部材にされたので、全く元どりの小屋にはならない。ライン川にまつわる歴史、解体し舟を作り、運び、組み立てるという過程、元の小屋と復元した小屋の対比、パーゼル現代美術館の現在などの諸々を、その時間の経過、プロセスを含めて作品化したのである。

スターリング氏は、近年興味を持って調査しているという彫刻家、ヘンリー・ムーアに関連した作品も制作した。彼は、カナダのオンタリオ美術館に置かれているムーアの《楯をもつ戦士》のスチール製の模造品を制作し、その像がロンドンからカナダに運ばれてきたエピソードと、黒海のゼブラ貝がオンタリオ湖に移されたところ、他の貝を駆逐して瞬刻間に繁殖した事実を踏まえ、その模造品を湖に沈め、18か月後に引き上げたところ、果たして貝が像にびっしりと付着していた。彼はそれを乾かして展示したという。その成果品には、ムーアの《楯をもつ戦士》の歴史と貝の歴史、そしてそれを踏まえて制作したスターリング氏の行為とプロセスが複合し重ね合わされていることはいままでもない。

スターリング氏は、自身の作品に、意図的に歴史を内在させているわけであり、結果としての復元した小屋や、貝の付着した像を見ても、作品の全体、すなわち行為の全体は分からない。そのようなアートは現代では珍しくない。形のある最終的な作品(物質)といった方がいいかもしれない。形(物質)そのものがない(残らない)作品が少ないのである。

ここまで書くと、だから現代美

術は分からないのだ、難解なのだという声が、また私の耳に届きそうな気がしてくる。しかし、よくよく考えてみると、程度の差はあれ、前提となる知識や、制作された環境をきちんと理解しないとよく分からない作品は少なくないのである。例えば、西洋絵画のキリスト教に関わる主題の作品は、聖書とそれへの歴史的理理解なくしては本当の意味は分からない。それどころか、私の専門とする浮世絵も、最終的な作者の意図を理解するのが困難な作品が少なくないのである。例えば、鈴木春信のやつし絵や見立絵がそうである。絵の背後にある故事や物語が分からないとただの奇妙な美人画ということになってしまう。

今、私が分析している歌川広重の「木曾海道六拾九次之内 恵智川」は名所絵(風景画)であり、作品中に題名が記されているので、最も分かりやすい作品の一つといえてよいであろう。半数くらいの日本人は、広重のことを覚えている。広重が浮世絵師で「東海道五拾三次」に代表される風景版画で有名であること、作品は、木曾海道つまりは中山道を描いた浮世絵版画のシリーズで、「恵智川」は宿駅の名であることも知っているであろう。図を見ると、水の少ない川に細く小さな木橋が架かっている。それを人が4人渡っている。手前の道には、牛を曳く女とその女に

話しかけている様子の2人の虚無僧がいる。川岸に「むちんはしはし銭いらす」と書かれた杭が建っている、というようなことも、特別な説明なしに多くの人が理解できるであろう。そこまですれば、「恵智川」とあるが、宿場そのものの景ではなく、宿場近くの景観ということにも思いが至るであろう。

しかし、その場所が恵智川の宿を出て、武佐に向かうとまもなく突き当たる恵智川であり、木の無賃橋は恵智川宿の町人5人がお金を出して1831年に完成させたものだという情報は、現地に行き、調査しないと分からない。ましてや、この図の基になったのが、広重が1837年に旅をしたスケッチであり、それが現在大英博物館に所蔵されていること、そのスケッチ帖には牛を曳く女も描きとめられていること、したがって版行されたのは1837年かその翌年であることなどは、ごく最近になって判明したことである。そこまでの情報がなくても絵は鑑賞できる。しかし、おそらく諸々の情報が鑑賞の妨げにはならず、むしろより深い鑑賞に貢献するということもいえる。作品にまつわる歴史・情報は、鑑賞に有益に作用することが多いのである。

スターリング氏の作品は、それを制作の過程から意図的に試みただけといえるのかもしれない。まあしかし、もう少し分かりやすい方がいいとは思っているのであるが。



図1



図1 Simon Starling Infestation Piece (Musselled Moore) 2007-2008 Steel sculpture, Eastern European zebra mussels Dimensions variable Exhibition view, "Simon Starling," The Power Plant, Toronto, Canada, 2008 Image courtesy of The Power Plant, Toronto Photo: Tony Hweer

図2 歌川広重「木曾海道六拾九次之内 恵智川」

季刊 美のたより No.170

平成22年5月6日

発行 大和文華館